

第2章 市民意識の現状

1 グループ・インタビュー調査の概要

(1) 目的

草津市の「住みやすさ」について、実際に居住される方がどのように感じているのか、また何を重視しているのか、草津市に愛着を感じているのかについて、グループ・インタビューにより、「利便性」以外に「住みやすさ」に通じる要因を聞き取り、草津市の地域資源との連動性を考察したうえで、「草津市に住んで良かった」という満足感に繋がる要素、またそこから「草津らしさ」という特性を導き出す。

(2) 調査方法

対象者を抽出し、協力依頼に応諾された市民に対してインタビューを行う。

対象者：2017(平成29)年5月31日を基準日として、草津市に住民登録のある者の内、それぞれ次の条件に該当する市民を抽出し400名に協力依頼。

対象地域：駅から半径1キロメートル内で、町界の大半が含まれる地域を駅前地域とし、それ以外を郊外地域とする。

○草津駅前対象地域

若竹町・渋川1～2丁目・西渋川1～2丁目・西大路町・大路1～3丁目・草津1～3丁目・西草津1～2丁目・平井1丁目・野村1～3丁目・野村6～8丁目

○南草津駅前対象地域

野路町・野路1～9丁目・南草津1～5丁目・東矢倉2丁目・矢倉2丁目・西矢倉3丁目

【子育て世帯】

抽出①：住定日¹10年未満かつ15歳未満の子がいる世帯

住基 ² 抽出件数 14,945	サンプリング件数 100
駅前 5,561	サンプリング 80 (以下、子駅短)
郊外 9,384	サンプリング 20 (以下、子郊短)

抽出②：住定日20年以上かつ15歳未満の子がいる世帯

¹ 住所を定めた日の略。

² 住民基本台帳(氏名、生年月日、性別、住所などが記載された住民票を編成したもの)の略。

住基抽出件数 712	サンプリング件数 100
駅前 173	サンプリング 80 (以下、子駅長)
郊外 539	サンプリング 20 (以下、子郊長)

【高齢世帯】

抽出③：住定日 10 年未満かつ 65 歳以上

住基抽出件数 4,063	サンプリング件数 100
駅前 1,591	サンプリング 80 (以下、高駅短)
郊外 2,305	サンプリング 20 (以下、高郊短)

抽出④：住定日 20 年以上前かつ 65 歳以上

住基抽出件数 20,387	サンプリング件数 100
駅前 5,298	サンプリング 80 (以下、高駅長)
郊外 15,088	サンプリング 20 (以下、高郊長)

依頼期間：2017 年 6 月 21 日から 6 月 29 日

応諾数：14 名(応諾率 3.3%)

グループ・インタビュー実施日：2017 年 7 月 28 日・29 日

(3) 調査結果(参考資料 1)

①インタビュー結果概要

(a) 草津に住んだきっかけ

- ・家の購入時の価格および通勤時の利便性(子駅短・高駅長)
- ・会社の同僚から住む場所として勧められた(子駅短)
- ・体が弱ったときにも生活しやすい(高駅短)
- ・湖西とも比較したが、新快速の便は大きかった(高駅長)
- ・親の家のそばに家を持った(子郊短)

(b) 草津に住んで感じたこと

- ・最初に住もうと思った時よりも住みやすい(高駅長)
- ・仕事が自由業で親のそばにいられるので良い(子郊短)
- ・他の地域よりも狭い範囲に必要な事が集まっていて住みやすい(高駅短)
- ・同じ時期に越してきた町内会の人と仲良くなっているので、このままここで過ごしたい(高駅長)
- ・自然と都市の双方が近くて良い(子駅短、子郊短、高駅短)

- ・機会があれば引っ越したい(子駅長)

- ・人が優しい(子駅短)

(c) 草津らしい愛着を持てるどころ

- ・ de 愛ひろば・蓮・琵琶湖・草津川跡地の歩道、自転車道

- ・ 宿場祭り・街道筋の街並み・草津宿本陣・矢橋帰帆島公園 など(表 2-1)

表 2-1 愛着を持てるどころ(インタビューから)

施設等	町並み・風景	食べ物等	イベント	改善により魅力を高められること
【多い】 de 愛ひろば 水生植物公園みずの森(蓮) 市域の寺社仏閣 矢橋帰帆島公園 天井川(旧草津川) 琵琶湖博物館(ナマズ) 三大神社(藤) 伊佐々神社(まつり) ロクハ公園 グリーンスタジアム 市民体育館 三ツ池運動公園(サッカー) 立命館大学 MIO	【多い】 びわ湖風景 史跡草津宿本陣 桜(天井川) 歴史・文化を感じる施設 自然(緑) 太田道灌 宿場町 草津川トンネル 散歩・サイクリングコース 田園と都会 常夜灯(旧草津川)	あおぼな 草津メロン 愛彩菜 はこずし 米(江州米・滋賀旭) 万願寺唐辛子 ほんもろこ 淡水真珠 アスバラ	宿場まつり イナズマロックフェス 街・華・人あかり 地域の神輿 びわ湖花火(帰帆島から)	まめバス(年間バス発行など) 治安 自然・文化・歴史を残す努力 健康相談(老後) 歴史と文化を大事に 地産地消⇒地元へは安く提供 人との触れ合い(場所含む) 子どもの多い街 老人施設 旧草津川のゴミ(市民意識) 年寄⇒病院 若者⇒子育て教育 ほかほかタウン(アプリ) 行政情報の広報の仕方

出所：草津未来研究所作成

(d) その他

- ・退職後にさらに利便性の高い京都市内などへの引っ越しを考えて、マンションを見にも行ったが、妻が引っ越したくなさそうなそぶりをして、あきらめた。理由は、専業主婦の妻が草津で生活している間に友人が増え、新しい地では友人がいないことを気にしていたから(高駅長)

- ・自然が近く、また生活に必要な施設も整っている(多数)

②インタビュー結果概要まとめ

草津に居住するのは、草津を選ぶというよりは、他の地域との比較で利便性が高く、比較的土建物価格が安い点が多い。ただし、他の地域との比較の上で、商業施設と自然の近さ、また勤務先への通いやすさなどのバランスが取れている点の評価が高い。特に近年住み始めた者にとって、自転車や徒歩で琵琶湖まで移動がしやすい点が好まれてもいる。また、東海道や中山道など歴史的な部分については、住み始めてから気づいている。

地域に住み続けている人にとっては、親などの代からの仕事を継いでいたりすると、選択肢がなかったがゆえ、また変えたいと思った行動が実らなかった経験を重ねたりしたが

ゆえに、不満を持つ場合が多い。

また、いわゆる転勤族の人やその伴侶などが、他の地域と比較した際に、草津に住みたいという意識を持っている点あげられる。それは、住んでいるマンションにおいて、適度な距離感を持った付き合いが可能で、また場合によっては転勤者が集まっていて似たような状況を経験しており、互いに理解しやすい点がある。

さらに、他の地域と比較した際には、自分の好む交通手段を中心にした移動がしやすく、京都への移動も近い、またサークルなどに参加するための移動が容易であるなど、自分の興味や好みに合わせやすいものが見つかりやすい。

その上で、人が優しく、しっかりしたコミュニティが存在しており、安全や安心を共に支える意識が醸成されていると評価されている。

2 街歩き調査の概要

(1) 目的

グループ・インタビュー調査において、草津市民を対象として「住みやすさ」を調査し、草津市に愛着を感じる場所などを探ってきたが、市外に住む人が、草津市に対してどのようなイメージがあるのか、また草津市に初めて訪れた人はどのように感じるのか、転入者が増加している草津市の「住みやすさ」を考える上でも調査する必要がある。

このような中、大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所都市魅力研究室より、Walkin' About³の開催申し出があったことから、当該イベントを活用して、草津市の魅力や課題について市外の方からの意見を聴取した。

(2) 調査方法

大阪ガス(株)都市魅力研究所主催による「Walkin' About@草津～南草津」の開催(参考資料2)にあたり、草津市からテーマを出し、そのテーマに沿って参加者が市内を自由に街歩きをして、それぞれの見聞や体験を発表する。

テーマ：草津市の居住魅力発見

開催日：2017年9月30日(土)

参加者：9人

³ 参加者が市内を自由に辿り、見聞や体験を発表共有する「まち観察」企画

(3) 調査結果

このイベントでは、草津駅から南草津駅までのまち歩きであったため、草津市郊外の情報を得ることは難しかったが、一部の参加者は事前に下見や、集合時間までに郊外へ行かれた方もあり、様々な意見を聞くことができた。その中でも参加者が一様に述べられた事柄は、人が親切であったことと、駅周辺には生活に必要な施設が集積されており、また歴史的な施設などもあり、非常に便利で住みやすいイメージであるとの感想であった。ただし、駅前の駐車場がわかりにくいこと、コミュニティバスの運行数が少ないこと、街灯が少ないことなどへの指摘もあった。

イベント終了後、主催者からイベント参加者の感想をまとめ、草津市の居住魅力を考える上でポイントとなる事柄について8つの視点から報告を受けた(表2-2)。

表2-2 居住魅力のポイント

視点	プラス要素	マイナス要素
身近にしばしば訪れたい場所はあるか	【歴史・文化】 駅周辺の宿場町の雰囲気 「史跡草津宿本陣」「草津宿街道交流館」 【子育て】 「琵琶湖博物館」「草津川跡地公園de愛ひろば」 【若者世代】 中山道沿いやde愛ひろばの飲食店	
高齢者・主婦・勤め人の買い物環境	【消費行動】 ショッピングモールや百貨店、量販店もあり、都市圏に行かなくても買い物ができる。 地元のお土産、特産物がある。	
移動手段		【市内交通】 駅前の駐車場がわかりにくい コミュニティバスの運行数が少ない 国道1号線・駅前大型商業施設周辺の交通渋滞
魅力的なアクティビティとコミュニティ	【アクティビティ】 サイクリングやスポーツなどができる場所がある 矢橋帰帆島などで釣りができる 【コミュニティ活動】 会館、集会所が多い 地藏盆などの地域行事が行われているのびのびと暮らしている雰囲気がある	南草津駅周辺が楽しみに乏しい
住宅環境	駅前の中古物件の価格が手頃	駅前の開発が矢継ぎ早に進められている
教育・子育て環境	駅前に学習塾、保育所、病院（開業医）が多い 大学がある	
暮らしの安全・安心		商店街への車の進入 総合病院が駅から離れている
暮らし心地	【自然】 立木神社周辺の川の水や緑が美しい 空の広さを感じられる 郊外に農地が広がる 【コミュニティ】 まちの人が優しい	小規模宅地造成地には緑が少なく街灯も少ない

出所：大阪ガス(株)都市魅力研究所報告を未来研究所で編集

3 街頭インタビュー調査の概要

(1) 目的

グループ・インタビューでは、草津らしい愛着を持てる場所として、「de 愛ひろば」「蓮」「琵琶湖」「草津川跡地の歩道・自転車道」「宿場まつり」「街道筋の街並み」「草津宿本陣」「矢橋帰帆島公園」など地域資源と思われる言葉が挙げられたが、回答者の大半が駅周辺の協力者であったことから、改めて郊外に住む市民に確認するため、郊外にある量販店において聞き取り調査を行い、これらが草津市に愛着を感じることでできる要素の一つとなり得るか、また、「住みやすさ」についての感想を聞き取った。

(2) 調査方法

草津市郊外にある量販店(新浜・駒井沢)において、インタビュー(参考資料3)を行う。

調査実施日：2017年10月7日・8日・9日

聞き取り件数：新浜 51件 駒井沢 50件

内訳：子駅短 3	子駅長 1	子郊短 19	子郊長 14
高駅短 2	高駅長 0	高郊短 8	高郊長 54

(3) 調査結果

① 街頭インタビュー調査結果

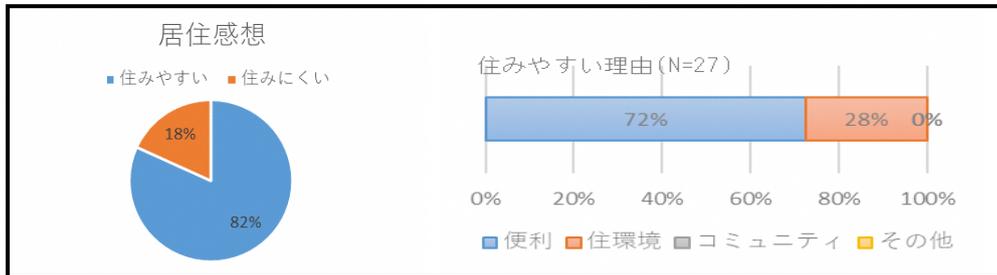
【子育て世帯】

郊外の市民33名への聞き取りでは、居住感想に関して「住みやすい」と思う割合は82%であった(図2-1)。「住みやすい」理由としては、居住年数に関係なく「便利である」と72%の回答(複数回答可)を得た。しかしながら「住みにくい」と思う理由は「不便である」が86%(図2-2)であった。その理由は、車がないと生活ができないという意見であり、実際に聞き取りした市民の内、車を利用して来た人の割合は76%(図2-3)であった。

愛着を持てる場所については、居住期間に関係なく、「琵琶湖」との回答が26%と最も多く(図2-4)、居住期間10年未満の市民は「琵琶湖」と「帰帆島」が同様に22%の回答(複数回答可)があった(図2-5)。その理由は、子どもと過ごせる場所とのことであった。また、居住期間10年未満の市民で、「愛着を持てる場所がない」との回答は26%であり、その理由は、居住期間が短いため解らないとのことであった。

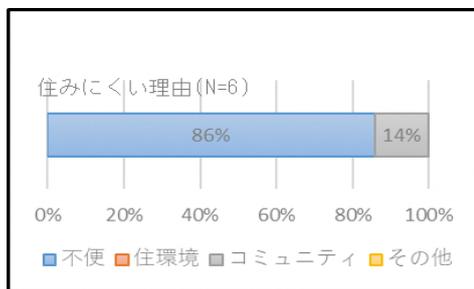
住み続けたいかについては、居住期間に関係なく「住み続けたい」という回答が73%であった。

図 2-1 居住感想(住みやすい)(N=33)



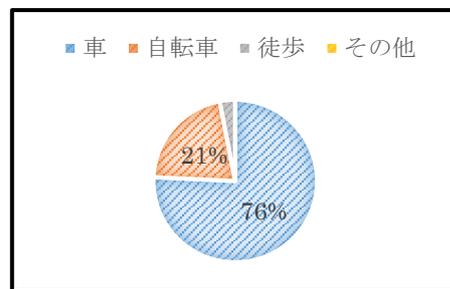
出所：草津未来研究所作成

図 2-2 居住感想(住みにくい)



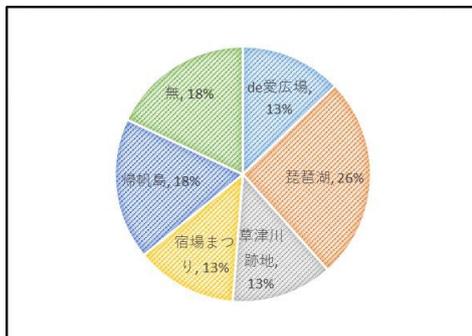
出所：草津未来研究所作成

図 2-3 交通手段(N=33)



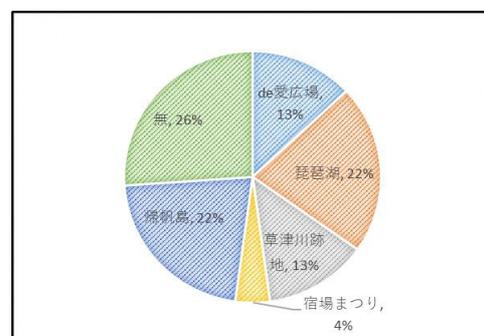
出所：草津未来研究所作成

図 2-4 愛着を持てる場所(全体)
(MA;N=39)



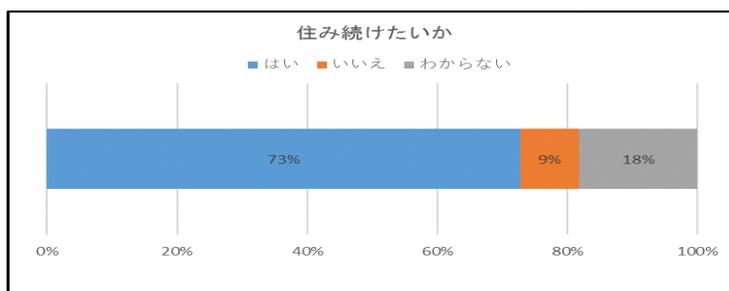
出所：草津未来研究所作成

図 2-5 愛着を持てる場所(10年未満)
(MA;N=23)



出所：草津未来研究所作成

図 2-6 住み続けたいか(N=33)



出所：草津未来研究所作成

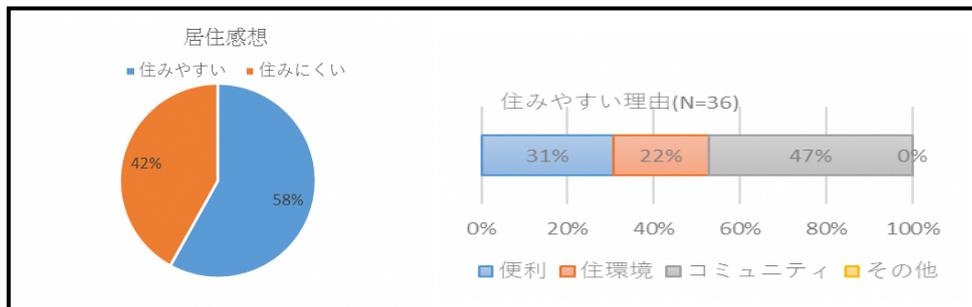
【高齢世帯】

郊外の市民62名への聞き取りのうち、居住感想に関して「住みやすい」と思う割合は58%であった(図2-7)。「住みやすい」理由としては、居住年数に関係なく「コミュニティが良い」が47%、次いで「便利である」が31%であった。「住みにくい」と思う理由は「不便である」が92%であり(図2-8)、その理由は、子育て世帯と同様、車がないと生活ができないという意見であり、「不便である」と回答した人の交通手段は全て車であったが、全体的には自転車の利用が多い(図2-9)。

愛着を持てる場所については、居住期間に関係なく「琵琶湖」との回答が38%と最も多く(図2-10)、居住期間10年以上では42%となった(図2-11)。「愛着を持てる場所がない」との回答は全体で37%あり、その明確な理由はなく、日ごろの生活の中で何も気にしていないとのことであった。

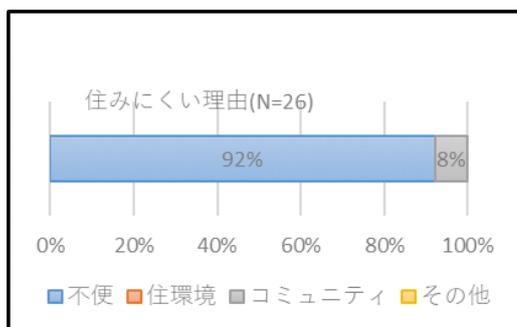
住み続けたいかについては、居住期間に関係なく、56%の方が「住み続けたい」という回答であり、34%の方が「わからない」との回答であった(図2-12)。

図2-7 居住感想(住みやすい)(N=62)



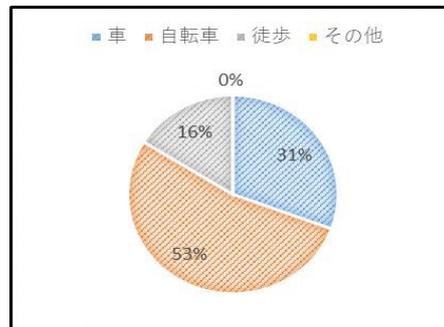
出所：草津未来研究所作成

図2-8 居住感想(住みにくい)



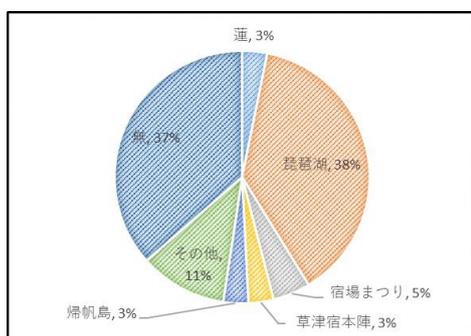
出所：草津未来研究所作成

図2-9 交通手段(N=62)



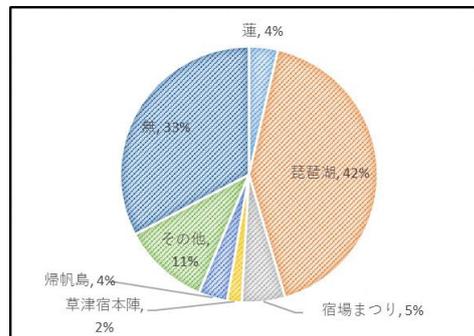
出所：草津未来研究所作成

図 2-10 愛着を持てる場所(全体)
(MA;N=63)



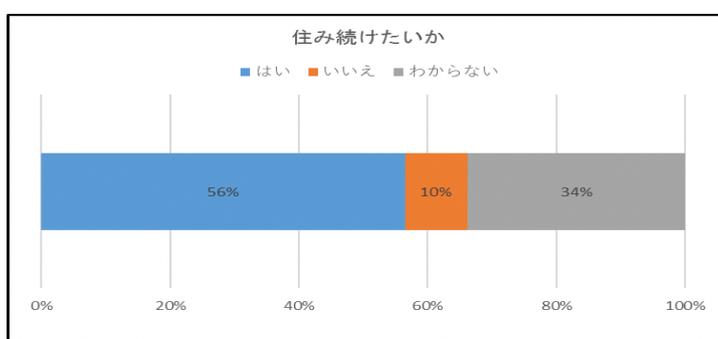
出所：草津未来研究所作成

図 2-11 愛着を持てる場所(10年以上)
(MA;N=55)



出所：草津未来研究所作成

図 2-12 住み続けたいか(N=62)



出所：草津未来研究所作成

②街頭インタビュー調査で見えてきたこと

郊外に住む市民の居住したきっかけは、「生まれてから」が多く、子育て世帯では、利便性が高いことから居住年数に関わらず「住みやすい」という感想が多くあった。しかしながら、高齢世帯の10年以上居住している方のうち、「住みやすい」という感想の理由が「利便性」よりも「コミュニティ」が良いことを挙げている。また「住みにくい」という感想であった市民が全体で34%であり(図 2-13)、その理由として91%が不便であることを挙げている(図 2-14)。

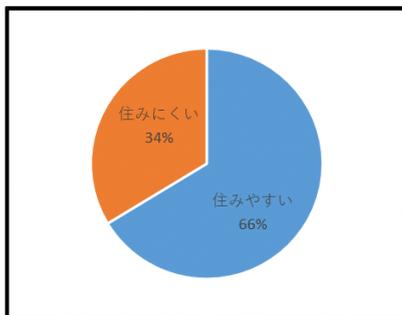
居住年数が増えるにつれ、地域との関係が深まっていることから「住みやすい」という感想に繋がっているものと考えられるが、自身の年齢から肉体的な行動範囲に制約がかかり、普段の生活に際して不便を感じることから、徐々に不便であると感じてくると考えられる。また、子育て世帯、高齢世帯ともに交通手段として車を利用している人が多く、郊外における日常の生活において車がない、または運転できないことや、子育て世帯においても、年齢を重ねることにより車での移動ができない場合は、

「不便で住みにくい」まちとを感じるようになってくると推測できる。

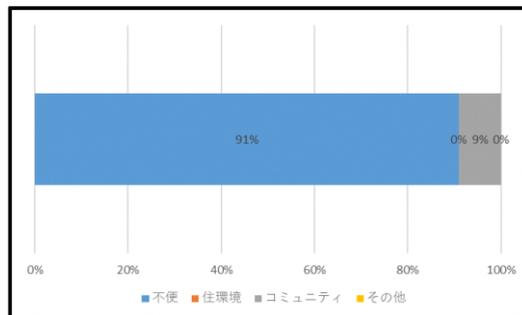
愛着を持てる場所については、子育て世帯、高齢者世帯ともに「琵琶湖」が多く支持された。このことは、今回の調査区域が琵琶湖に面していることから、気軽に訪れることができる場所であるためと推測するが、グループ・インタビューにおいても「琵琶湖」を支持する市民が多くいたことから、「琵琶湖」は草津市民にとって身近な存在であると考えられる。また、愛着を持てる場所がないと回答した市民は、全体で子育て世帯 18%、高齢世帯 37%あり、傾向としては居住期間の短い子育て世帯ほど愛着を持てる場所が少なかった。

「住み続けたいか」の問いには、子育て世帯で 73%、高齢世帯で 56%の方が「住み続けたい」との回答であったが、子育て世帯、高齢世帯ともに「わからない」と回答した人のうち「愛着を持てる場所はない」と回答した割合は約 50%であった(図 2-15)。このことは、愛着のある場所の有無によって、「住み続けたい」と感じる市民の割合を増やすことができると考えられる。

図 2-13 居住感想(全体) (N=95) 図 2-14 住みにくい理由(全体) (N=33)

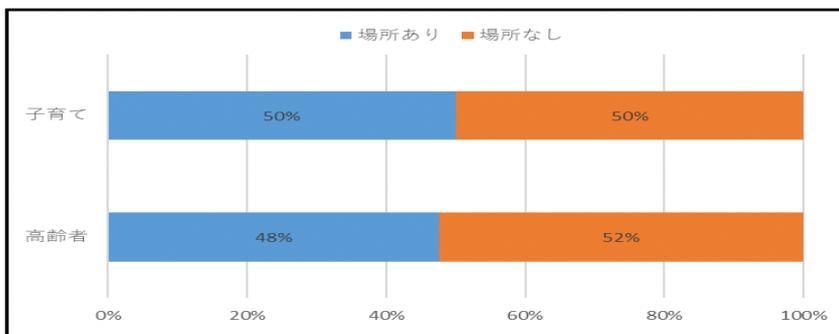


出所：草津未来研究所作成



出所：草津未来研究所作成

図 2-15 愛着の持てる場所 (N=27)



出所：草津未来研究所作成

4 アンケート調査の概要

(1) 目的

草津市の「住みやすさ」について、実際に居住される市民の方が、居住地や居住年数、世帯構成などの違いにより何を重視され、また、草津市に愛着を感じることができているのかについて、アンケート調査により分析する。また、内閣府が実施している国民生活に関する世論調査(以下「世論調査」という。)と比較し、草津市が優位にあると考えられる分野を検討する。

なお、本アンケートにおける居住地は、「新市街地」「旧市街地」「新旧混在地」「郊外」の4区分に分類(参考資料4)、居住年数については、「10年未満」「10年から20年未満」「20年以上」の3区分に分類し、世帯構成については、「小学生までの子がある世帯」(以下、実子育世帯という)「仕事をしている子と同居している世帯」(以下、二世帯同居という)「同居の子がいない19歳から60歳の世帯」(以下、大人世帯という)「61歳から70歳の世帯」(以下、準高齢世帯という)「71歳以上」(以下、実高齢世帯という)の世帯5区分に便宜的に分類して検討した。

(2) 調査方法

対象者を抽出し、郵送によりアンケート調査を行う。

対象者：平成29年9月30日を基準日として、草津市に住民登録のある15歳以上の市民とし、その中から無作為に抽出した3,000人に郵送で調査票を送付。ただし、無作為抽出時には、小学校区ごとの人口比率、男女比率、15歳から64歳と65歳以上の比率を考慮し抽出数を按分した。

表 2-3 小学校区別無作為抽出数

小学校区	15-64歳	65歳以上	男性計	15-64歳	65歳以上	女性計	抽出件数
志津	121	34	155	106	33	139	294
志津南	48	15	63	49	16	65	128
草津	95	29	124	88	37	125	249
大路	103	29	132	107	30	137	269
矢倉	82	25	107	80	34	114	221
渋川	89	25	114	86	23	109	223
老上西	67	20	87	69	25	94	181
老上	78	23	101	77	26	103	204
玉川	120	34	154	95	30	125	279
南笠東	80	23	103	66	22	88	191
山田	64	21	85	60	35	95	180
笠縫	81	28	109	82	47	129	238
笠縫東	86	27	113	83	36	119	232
常盤	38	13	51	38	22	60	111
全体	1,152	346	1,498	1,086	416	1,502	3,000

出所：草津未来研究所作成

回収期間：2017(平成29)年12月1日から12月11日

回答方法：郵送またはインターネット

回収数：997件(33.2%)

アンケート内容：参考資料5参照

(3) 調査結果

①回答者の状況(参考資料6:p.56)

回答者の割合は、男性37%、女性46%、その他および未回答17%であった。居住地別では、新市街地24%、旧市街地31%、新旧混在地23%、郊外20%、不明2%であった。年齢別では、15歳から24歳の回答が少なく、居住地別で差違はあるものの、市域において各世代からほぼ均等に回答を得ることができた。

②アンケート調査結果概要

(a)「住みやすさ」に対する意識(参考資料6:p.60)

この設問では、各質問に対する回答内容により、「そう思う」を2点、「ややそう思う」を1点、「あまりそう思わない」を-1点、「そう思わない」を-2点で点数化を行い比較した。

その結果、どの区分においても、「草津市は、愛着を感じるまちですか？」の設問に対し高い値を示していた。

居住地別では、「近所の人と話をすることは多いと思いますか？」「近くに親しく話せる人はいますか？」「何か困ったことがあった時に、近くに助けてくれる人はいますか？」の設問に対し、新市街地は郊外より低い値であった。また「お住まいの周辺には緑が多いと思いますか？」の設問については、郊外が最も高く、新市街地は低い結果となった。「琵琶湖や琵琶湖畔に遊びに行くことが多いですか？」の設問に対しては、各居住地で低い値であった。

居住年数別では、居住年数が長くなるほど、「近所の人と話をすることは多いと思いますか？」「近くに親しく話せる人はいますか？」「何か困ったことがあった時に、近くに助けてくれる人はいますか？」の設問に対して高い値となり、「地域の伝統や文化について知っていますか？」の設問についても同様の高い値となっている、しかしながら、「自然に触れることのできる場所が多いと思いますか？」の設問に対しては、居住年数が長い程低い値となった。また、「琵琶湖や琵琶湖畔に遊びに行くことが多いですか？」の設問に対しては、居住年数に関わらず低い値であった。

世帯構成別では、大人世帯で「地域の伝統や文化について知っていますか?」「近所の人と話をすることは多いと思いますか?」の設問に対して低い値となっている。また、「琵琶湖や琵琶湖畔に遊びに行くことが多いですか?」の設問に対しては、各区分で低い値となった。

この設問項目からは、それぞれの区分で回答は異なるものの、既に草津市に愛着を感じている市民は多く、人とのコミュニケーションや、周辺に緑が多く自然に触れることができる場所の多さと連動されているように考えられる。特に郊外の方が緑を感じ、人との繋がりも多く、全体的には、居住年数が長くなるほど地域や人との繋がりが増し、歴史文化の認知度も高くなるものの、逆に自然とのふれあいは低くなる傾向にあり、琵琶湖や琵琶湖畔へ行くことは少ないという結果が出た。

(b) 日ごろの生活に対する充実度(参考資料 6:p. 61)

世論調査では、充実感を感じている割合は73.5%(参考資料 7-1)であったが、草津市はどの区分においても80%を超えており、全国から見ると充実感を感じられるまちであることがわかる。充実感を抱く時は、全体的に「家族団らんの時」「ゆったりと休養している時」「友人や知人と会合、雑談している時」が多く、この点は世論調査の状況(参考資料 7-2)と一致している。

区分ごとにみると、居住地別では新旧混在地において「家族団らんの時」よりも「趣味やスポーツに熱中している時」の割合が高くなっている。居住年数別でみると、20年以上の場合「家族団らんの時」よりも、「友人や知人と会合、雑談している時」の割合が高くなっている。世帯構成別にみると、実子育世帯や二世帯同居は「家族団らんの時」の割合が高く、大人世帯では「ゆったりと休養している時」の割合が高く、準高齢世帯は「趣味やスポーツに熱中している時」「友人や知人と会合、雑談している時」の割合が増え、実高齢世帯は「友人や知人と会合、雑談している時」の割合が高くなっている。

このことから、実子育世帯や二世帯同居の場合は、家族との時間を大事にし、高齢になるにつれて友人や知人との時間を大事にしていると推測できる。

(c) 日ごろの生活の満足度(参考資料 6:p. 62)

世論調査では、現在の生活に満足している人の割合73.9%(参考資料 8)であったが、草津市では大人世帯の区分以外は80%を超えており、充実度と同様に全国から見ると現在の生活に満足している市民が多いことがわかる。

(d) 日ごろの生活での悩みや不安(参考資料 6:p. 62-63)

世論調査では、悩みや不安を感じている人の割合は63.1%(参考資料 9-1)であったが、草津市ではどの区分でも世論調査の割合を超えている状況であり、少ない区分でも準高齢世帯が65%、最も多い区分で大人世帯の区分で84%であり、悩みや不安を抱えた市民が多いことがわかる。

世論調査における悩みや不安の内容は、「老後の生活設計」が最も多く、次に「自分の健康について」「家族の健康について」⁴(参考資料 9-2)と続くが、草津市の場合も、「自分または家族の健康」「老後の生活設計」の割合が高い。しかしながら、居住年数が10年未満や、実子育世帯は「自分または家族の生活(進学・就職・結婚・子育てなど)上の問題」の割合が高くなっているが、世論調査では家族と自分の生活の二つの設問にしていることから、同様の結果が出ているものと推測できる。

(e) 癒される場所(参考資料 6:p. 64)

どの区分も癒される場所として「家の中」が最も多く、次いで「琵琶湖の見える場所」「緑のある公園」の割合が高くなっている。しかしながら、草津市内に癒される場所があると回答した市民は40%前後であったことから、不安や悩みの解消につながる場所が「家の中」以外には少ない状況にあった。このことは、家庭での生活が充実しているとも考えられる。また、住みやすさに対する意識では「琵琶湖」へはあまり多く行くことはない状況であったが、癒される場所としては「琵琶湖」が選ばれている。

(f) 公園等の利用状況(参考資料 6:p. 65)

住みやすさに対する意識では、「琵琶湖」へはあまり多く行くことはない状況であったが、どの区分においても、「琵琶湖岸」へ行った方が多く、実子育世帯は「矢橋帰帆島」や「ロクハ公園」、新市街地や新旧混在地は「草津川跡地公園」へ行った割合が高くなっていることから、公園までの距離が利用に影響を与えていることが考えられる。「琵琶湖」については、数多く行くことはないが、全く行かないということではない状況である。また、居住年数が長くなるにつれて、「どこにも行っていない」の割合が高くなる。

⁴ 草津市は一つの設問「自分または家族の健康について」としている。

(g) 文化施設等の利用状況(参考資料 6:p. 66)

どの区分においても、「市立図書館」が最も多く利用され、次いで「琵琶湖博物館」が多い。しかしながら、「どこにも行っていない」の割合も高く、特に郊外や、大人世帯が特に多い。

(h) 運動施設等の利用状況(参考資料 6:p. 66)

どの区分においても、「どこにも行っていない」の割合が非常に高い。文化施設等も含め、利用目的により利用者に偏りが生じていることがうかがえる。

(i) 草津ブランド(参考資料 6:p. 67)

草津メロンは、どの区分でも購入、消費される割合が高いが、他の農産物については割合が低く、草津ブランドとしての認知度が低いと考えられる。

(j) イベントへの参加状況(参考資料 6:p. 67)

この設問では、質問に対する回答内容により3点満点の点数化を行い、総計に対する比率で比較した。「草津宿場まつり」と「草津街あかり・華あかり・夢あかり」は居住年数が10年未満で低く、新市街地が高かったことから、会場までの距離と認知度の影響と考えられる。「みなくさまつり」については実子育世帯と新市街地が高かったことから、会場までの距離とイベントの内容が影響していると考えられる。「イナズマロックフェス」については、大人世帯と郊外が高かったことから、会場までの距離と、イベントの内容が影響していると考えられる。「草津納涼まつり」と「草津まちイルミ」については新市街地が高いことから、会場までの距離が影響していると考えられる。「地域のお祭り」や「地域全体のイベント」については、居住年数が長い市民や、郊外ほど高いことから、居住年数による地域とのかかわり、また郊外は地域との関わりが強いと考えられる。

(k) サークル活動への参加状況(参考資料 6:p. 68)

どの区分においても、半数以上は参加していない状況であったが、旧市街地と新旧混在地は、参加または参加意思が他の居住地より若干高く、居住年数が長くなるにつれ、また高齢になるにつれサークル活動に参加する割合が高くなっている。参加している市民の主たる参加理由は「趣味」または「仲間づくり」であったが、居住年数が10年未満は「趣味」が多く、居住年数が長くなると「生きがい」や「仲間づくり」の割合が若干増える、また高齢になるにつれ「仲間づくり」の割合が増えることから、参加のきっかけは「趣味」から始まり、その後「仲間づくり」へと進むことが考えられる。

(l) 町内会などの活動参加状況(参考資料 6:p. 69)

町内会活動や寺社等の活動については、居住地別では郊外の参加率が高く、居住年数も長くなるにつれ参加率は高くなる。世帯状況別でみると、大人世帯が、どの活動においても参加率が低い結果となっている。

参加された市民の参加理由は、どの区分も「輪番等により役員になったため」の割合が高く、新市街地や大人世帯が「参加する気はない」の割合が高い。また参加しているにもかかわらず、「参加する気はない」の割合も高い。なお、居住年数が長くなるにつれ、また高齢になるにつれ「仲間づくり」の割合が高くなってきている。

(m) 草津市のイメージ推移(参考資料 6:p. 70)

この設問では、草津市のイメージを、住む前と住んだ後、また生まれた時から住んでいる人については10年前と現在の感じ方の違いの推移を比較した。1以上が当初のイメージと異なる内容である。

居住年数別にみると、20年以上居住している市民は、「障害者向けの支援が充実している」が特に多く、「高齢者向けの支援が充実している」「様々なお店の選択肢が多い」を多く選択していた。また居住年数が10年未満の市民は、「コミュニティ活動が活発」が多かった。

居住地別でみると、旧市街地において「障害者向けの支援が充実している」が特に多く、新旧混在地において「コミュニティ活動が活発」や「高齢者向けの支援が充実している」が多かった。新市街地においては、「障害者向けの支援が充実している」や「教育環境が充実している」が多く、郊外においては「障害者向け支援が充実している」「高齢者向けの支援が充実している」「子ども向けの支援が充実している」が多かった。

世帯構成別では、大人世帯で、「障害者向けの支援が充実している」「高齢者向けの支援が充実している」が多く、実高齢世帯では、「特産品が多い」「スポーツ文化施設が多い」「障害者向けの支援が充実している」「様々なお店の選択肢が多い」を多く選択していた。実高齢世帯は、10年前からの比較と考えられることから、ここ数十年間の草津の状況を反映していると推測できる。

(n) 草津市のお勧め度(参考資料 6:p. 71)

全体では「お勧めできる」「お勧めしてもよい」の回答が65.5%を占めているが、居住地別では「郊外」が若干低く、また居住年数が長く、高齢になるについて若干低い結果となっている。しかし、「新市街地」や居住年数が10年未満、実子育て世帯はお勧め度

が若干高くなっている。

(o) 自然災害への備え(参考資料 6:p. 71-72)

この設問では、自然災害時などに住民間、家族間での協力が必要であることから、その意識の有無を確認した。

住民同士の助け合いについては、全体では 75%以上が「できる」「どちらかといえばできる」の回答であったが、大人世帯では 62.6%と若干低い状況であった。また、避難所の認知度では、全体で 81.6%以上が「知っている」との回答であったが、新市街地では 71.6%、居住年数が 10 年未満では 63.6%、大人世帯では 67.3%と低い状況であった。併せて家族や地域の方と連絡方法などを相談しているかの設問では、相談していない方が全体で 35.8%であるのに対し、新市街地では 40.7%、居住年数が 10 年未満では 48.6%、大人世帯では 53.3%、実子育世帯では 40.3%と高い状況であった。